

8月になると思うこと “平和”

～薬剤師流の平和の訴え方～

九州医療科学大学薬学部臨床薬学第二講座

高村徳人

夏（8月）になると広島と長崎の原爆による悲劇に関する戦争の番組が増える。この原爆の脅威を風化させてしまえば、再び戦争という悲劇が繰り返され“平和”を維持することはできない。かつての私はこのような番組を目にし、「平和である幸せをもっとかみしめるべきだ」と強く想う自身の存在に気づくということを毎年8月に繰り返していた。

小学5年生の頃だったろうか、父が私に戦争体験を語ったことがある。父は招集され宮崎から千葉（千葉県にあった軍事施設）に列車で向かったようだ。その途中で東京に知り合いがいる人たちはそこで下車したそうである。なんとその夜が東京大空襲だったとのこと。その時、列車で東京まで一緒だった人たちの多くが亡くなったということだった。その話を聞いて戦争の恐ろしさを強く感じた記憶がある。それから数日たって、ふと思った。もし、父が東京で下車していたら、父も私も今この世に存在していなかったかもしれない、と。なんとなくだが、その時、自身がこの世に存在することには意義があるような気がした。また、こんなこともあった。私が大学1年の時、授業中に気分が悪くなり保健室で薬をもらったことがある。保健室の先生（年配の女性）との会話で「宮崎から上京し、この大学に入学しました」と話すと「宮崎だったら、特攻隊の基地があった知覧をご存知かしら？私は特攻隊の人たちを見送っていたことがあるのよ。とても悲しかったわ」と私に言われたことがあった。その時、即座に父の話を思い出したことがある。それでも、私がこれまでかかわってきた人々に対し“平和”について一度も語ったことはない（これに関し私は50年以上罪悪感を持ち生きてきた）。あるものを手にする前までは……。そのあるものとはADME人形である。現在、私を訪ねてくれる方々に、時間があれば、ADME人形で薬のADMEの変化と血中濃度との関係を説明し本人形の分かりやすさを伝えている。その際、必ずADME人形の服の襟の前方を下げて「PEACE」の文字を見せて“平和の大切さ”を訴えている（これにより私の罪悪感は希望に変わった）。もちろん、服薬指導後にPEACEを見せるだけで相手には十分に伝わるのである（写真1）。そもそも、服薬指導は目の前の患者さんに早く良くなって幸せになって欲しいという薬剤師の想いが既に込められているからなのである。

平和の訴え方として、とても興味深い番組がNHKで放送された。その内容はというと、広島に住む女子中学生が「私の平和」と題して写真を10枚展覧会で発表するまでの“本日の特集”的な番組である。彼女は愛用のフィルムカメラで撮ってきた写真の中から戦争に直結する写真（弾薬庫跡地や戦没者慰霊碑など）は自分から遠すぎてピンとこないで選ばず、友達と楽しく会話しながら通っている通学路の風景の写真や親友の笑顔の写真という身近なものから平和を伝えることにしたのだ。展覧会に訪れた方が、「身近な幸せから平和を伝えようとしていることが良く分かります」というようなコメントをされていた。“平和”は“戦争”から訴えなくても良いのだと思う。私も身近なところに平和を訴えるものはあるのだと確信する。だから、薬剤師のADME人形を用いた服薬指導（薬剤師の日常の仕事）から“平和”を訴えるのも良いのではないかと私は考えている（先にも述べたが、必ずしも言葉で訴える必要はなく首の下の“PEACE”を見せるだけでよい）（写真1）。ADME人形による服薬指導は薬剤師流の平和の訴え方なのである。



写真1 ADME人形の「PEACE」

ADME人形を使ってスポーツ選手やその関係者に“ドーピング”あるいは“うっかりドーピング”など（写真2左）の説明を行う中で“平和”を訴えていくこともよいと思う。あるいは、大麻や覚せい剤などを使用することで頭も身体も破壊されていく薬物乱用の怖さ（写真2右）を未成年に教える中で“平和”を訴えていくこともよいと思う。これらの訴えには服薬指導同様、相手の幸せを願う心が宿っている。相手の幸せを願う心は平和を願う心とイコールであると思う。



写真2 ドーピング・うっかりドーピング（左）と薬物乱用（右）